

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。



Jensen 1200XL

1965年頃に発表されたJensen社の集大成モデルで正面のデザインの違いの3種類が販売されていた。見た目はちょっと大きめの洒落たデザインのスピーカーだが、搭載ユニットは現在に至っても例を見ない38cmウーファーを1台に4機搭載した4ウェイ7ユニット構成となっている。大口径のフェリリック振動板を持つ強力なミッドレンジドライバと4発のウーファーから繰り出される低音の存在感は、他の機種からは体験できないサウンド。その奏でる音楽も分厚く締まったハイスピードな低音と、滑らかで明るく伸びやかな中高音が音楽ソースを選ばず気持ち良く鳴ってくれる。サイズは幅101cm、高さ77cm、奥57cmで質量は110kg。市場価格は320～360万円ベア

第12回 Jensen

本誌23号でも紹介したJensen社は1929年にスピーカーの専門メーカーとしてデンマーク出身のピーター・ジェンセンによってシカゴに設立された。ドライバー、ツイーターのダイアフラムに薄いフェリリック樹脂が使われ、ウーファーは軽く張りのあるコーン紙が使われていることで、音の特徴としては他のシステムをしのぐ反応の速い重低音再生が可能になる。Jazz、Classic、Popsとジャンルを選ばず対応できるのも魅力。同社の製品は当時、本拠地がアメリカ東海岸であったため日本にはあまり輸入されなかったようだ。

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



Jensen 1200XLのリア部。スペックも記されている



キャビネット構造は基本的には25mm厚の集積材を使った強固な密閉タイプとなっているが、下向きの2個の38cmウーファー用にスリットが斜め前に設けられている。また、ユニットの配置も音のフォーカス密度を高くするためにミッドレンジホーンを取り囲むように配置されており、正面中央にホーン開口部を縦にホーンドライバがあり、その両脇を挟むように38cmウーファーが正面向きに2機、そのすぐ後ろに下向きに2機搭載され、ホーン開口部の上半分にツイーターと、スーパートウィーターが配置されている



正面のデザインは3種類が存在。今回紹介するのはヨーロッパ調のデザイン

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Jensen



◀ P15LF

アルニコマグネットを搭載した38cm口径のウーファーで、固く軽い紙の振動板で構成されている。能率も97dBくらいあり高効率になっている。布製のギャザードエッジが採用されているため、ハイスピードで厚みのある低音再生が可能になっている



▲ RP302A

PR-100 Imperialの後期型モデルにも搭載されているJensenを代表するフェリリック振動板を持つツイーターで、正面のホーン開口が初期モデルの丸から四角い横長に変更になり、音像のフォーカスがよりシャープになっている



▲ E-100

このシステムのために新たに開発された他社では例のないフェリリック振動板のドーム型のスーパートウィーター。10000Hzから上の帯域を受け持っており、滑らかでクリアな音色、かつ38cmウーファー4機のエネルギーに対応できる優れたスーパートウィーターである

◀ RD-500

アルミダイキャスト製の重厚なショートホーンに4インチ口径のフェリリック振動板を搭載している。このサイズのフェリリック振動板を持つシステムは他にも例が少なく、このサウンドの重要なポジションを受け持っている

ジャズ喫茶に、というより自分が欲しいまぎれもなく過去ベスト3に入る音

気持ちよく晴れ渡った朝、高速を飛ばしてアトリエJe-teeの倉庫に向かった。第10回のトゥルーソニック編に続いて2度目の訪問となる。ここは倉庫というより趣味のいい古道具屋という気が漂っていて、なにやらときめいてくる。店舗として商品を陳列していないから、余計にそう思う。

もうすでに日本の主役ジェンセンの1200XLがセッティングされていた。大きい。いつもの目黒の店では、こりゃ取まらない。4ウェイ7スピーカー、38cmが4発も入っていると岡田さんは説明してくれた。しかし、そのたまたまに強烈なスベックをあえて押し殺すような節度がある。

ウィリアム・カーターのバロック・ギターが静かに流れている。フェルナンド・ソルの初期作品集だという。会話よりほのかに小さい音量だが、まったく無理なく伸びやかな音だ。懐が深い。たまたものではない。こういうのをストレスのない音なんだなと思った。

50畳という広い部屋で、しかも小音量なのに楽器の骨格がわかる。左右のスピーカーは4〜5m離れている。それを一辺とする正三角形のポジションに僕は座った。しみじみ吟味してみると、悠然としていながら大味ではない。細部がきちんと出てくる。仕事はおしまいに、ゆっくり聴きたいと心から願った。岡田さんは限界を試すかのように新し

い録音のジャズ・ピアノ・トリオ(ロバート・ラカトシユ)をかけた。ガバツと音量が上がった。

ここまで器が大きいと感じさせるスピーカーはそうそうないだろう。見た目の外すではない。度量が大きいのだ。オーラがある音というのだろうか。一生懸命追い込んで、チューンされたシステムの音はよく聴くことがある。口惜しいけどそういった努力を軽く踏み越えた先にある威厳と貫禄が宿っている。生まれながらに備わっている格がある。

続けてとにも晩年のミルト・ジャクソンとアート・ベッパ、さらにご存じコルトレーンの「バラード」。下衆っぽい話、これは金を稼げる。顔はクラシカルだが、ジャズ喫茶に置きたい。誰かこのスピーカーを看板にして開店して欲しい。いや、本当の本音としては、自分が欲しい。場所も資金もないけどねえ。なにかと妄想させてくれるスピーカーなのだ。

趣を変えてヨーヨー・マの「パツハ無伴奏チェロ組曲第一番ト長調」が始まった。天才チェリストの真髓に肉薄してくれといわんばかりに音量はかなり持ち上がっている。鬼気迫るかのようになり力強く鳴り響く。鬼気を発しているのはヨーヨー・マなのか、それともジェンセンなのか。よくわからないけれど、分析はどうでもいいや。どっちにも感動した。まぎれもなく本連載の過去ベスト3に入る音だった。